

「大学と初・中・高校との連携」

徳田 光治

はじめに

成城学園は、23区にありながら11.3ha（東京ドーム2.5個分）の敷地に、5,841名の学生（大学生5,728名・院生113名）、1,571名の生徒（中学生726名・高校生845名）、675名の児童、120名の園児、1,063名の教員、202名の職員がワンキャンパスにいる希な学園である。（2014年5月1日現在～学園HPより）

教職科目を担当している筆者としては、大学卒業生の6%～8%が教員免許状を習得し、その内の5%～10%が教職に就いている本学において、このワンキャンパスの利点を生かした指導がどのようになされてきたのか、そして、今は何をなすべき時なのかを模索しているところである。昨年の研究ノート（『成城大学共通教育論集』第6号）での課題として、中・高・大の連携強化をあげているので、途中経過ではあるが現状を報告したい。

今まで、総合学園としてのメリットを生かした異年齢の交流の構築や、教育研究所を中心にして各校での実践報告がなされてきたので、各校間の連携の現状を再確認し、大学としての関わり方について検証したい。また、特に教職課程を履修している学生達の異年齢交流や現状を調べ、これからの可能性について再構築したい。

1. 各校の連携実践（2014年）

成城学園創立100年の大計として第2世紀プランが発表され、第2世紀の成城教育として「教育改革」、「教育環境整備」、「地域・社会連帯」を推し進めるようになった。

その中核は教育改革で、「国際教育」・「理数系教育」・「情操・教養教育」を3つの柱とし、2017年度から全校で新カリキュラムへと移行することになった。

近年、学校間の枠を超えた教職員の実践交流が増えた。幼初間では「ジョイント期カリキュラム」(幼初一貫カリキュラム)への試行、初中間では「中一ギャップ」解消のための体験学習や説明会、中高大間では高校生活や大学生活への体験談や進路指導、高大間では大学の紹介やキャリアサポートが行われている。その一部を紹介すると、

(1) 初等学校

- 3月 「高校教員が特別授業」
高校物理の教師が6年生に「ばね」の授業
- 5月 「中学校の説明会」
中学校の教員が、6年生や保護者に中学生生活を説明
- 6月 「幼稚園との連携」
2年生が幼稚園年長組に「読み聞かせと自由遊び」
- 9月 「体験授業」
6年生が中学の「国語」・「社会」・「理科」の授業を体験

(2) 中学校

- 2月 「キャリアガイダンス」
3年生が大学生やキャリア支援部職員から、「高校生活や進路指導」にむけての体験談を聞く

(3) 高等学校

- 1月 「キャリアサポート特別講義」
成城大学進学予定の3年生に「MAP (May Advanced Project)」を解説
- 5月 「ミニ講義」
3年生に、成城大学各学部全11学科の教員が、大学の授業入門編ならびに各学科で学ぶことが出来る事柄を講義してもらう。

(4) 大学

- 初等学校へ 「部活動のコーチ」・「行事の付き添い」・他
- 中学校へ 「キャリアガイダンス」・「チューター」・「部活動のコーチ」・
「行事の付き添い」・他
- 高等学校へ 「キャリアサポート特別講義」・「ミニ講義」・「部活動のコーチ」・
「行事の付き添い」・他

(5) 全学園

- 文化祭 「11月2・3日」
- 学園音楽祭 「1月」
- 成城学園英語教育連携ワークショップ
- 成城学園理数系教育連携ワークショップ
- 国際交流センター
- 学園図書館図書室連絡会
- 全学園教職員スキー研修会
- 学園映画鑑賞会

等があり、着実な歩みが実践されている。

2. 大学生による学校支援ボランティア

学校支援ボランティアは、営利を目的とせず（いわゆるボランティア活動）、学校の学習活動、行事活動、環境整備などの支援を行う保護者や地域住民や大学生のことで、1996年の中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」において正式に取り上げられた。

同答申は、「学校・家庭・地域社会の連携」として「開かれた学校」づくりを提言し、そのための具体策として、「地域の人々を非常勤講師として採用したり、あるいは、地域の人々や保護者に学校ボランティアとして協力してもらうなどの努力を一層すべきである」と述べている。

教員に求められる資質や能力として、「専門職としての高度な知識・技能」は

① 頭脳スポーツ	1名 (男)	OB 職員
② サッカー部	5名 (男3・女2)	大学サッカー部3、OG 社会人
③ 体操部	3名 (男1・女2)	社会人2、保護者2
④ テニス部	4名 (男1・女3)	OB 職員1
⑤ バレー部	1名 (女)	大学生
⑥ ラグビー部	2名 (男)	大学ラグビー部、OB 社会人
⑦ 陸上部	1名 (女)	大学生

神経系の発達がほぼ完成し、形態的にも安定して正確な技術や動作が習得可能な「ゴールデンエイジ (9歳～12歳頃)」に、情熱と忍耐を持って科学的で理論的な一貫指導を目指して、楽しさを中心にして教え続けている。大学生にとって、自分の学んだ学校で自分が練習して成長したスポーツを教え、これからも自分自身が成長し続けるであろう。ワンキャンパスならではのこの伝統を、これからも後輩に引き継ぎ、より充実していくことを期待している。

4. 中高校との行事での連携

中学校1年生の「海の学校」は、大学の水泳部員やOB・OGによるプール指導や本番の海での実践練習や遠泳指導によって支えられていた。ちなみに、1990年の「富望荘」での4泊5日の記録を見ると、生徒237名の参加に対して、教職員が25名、卒業生コーチが23名、大学生コーチが40名で無事に終えた。しかし、最近は大学生コーチの不足に悩まされ(部員不足や大学の前期試験と重なる)、「海の学校」の形態も変更せざるを得なくなった。2007年から「新しい海の学校」がスタートし、後述の「高校ライフセービング部員」の協力によって、プール指導や海の学校が再構築された。

中学校2年生の「山の学校」は、初等学校の教職員、高等学校の教職員の協力により無事に継続されている。また、かつては大学の教職員の参加もあり、中学生の実態や教職員の仕事についての理解を得られた。もっと多くの他校教職員の参加を希望するが、それぞれの校務と重なり無理をお願いできないのが残念であ

る。また、中学校で「山の学校」を経験した大学生が「ワンダーフォーゲル部」を再興し、2011年より「山の学校」の付き添いとして参加してくれるようになったのが大変に心強い。

「スキー学校」も他校の教職員、大学生、OB、OGにコーチとしてお世話になっているが、大学生にとっては「海の学校」と同様に後期試験との兼ね合いで参加が少なくなり、現在は学園のホームページで希望者を募っている。

中学校の運動部や文化部では、コーチとして多くの大学生やOB・OGにお世話になっている。

① 野球部	3名(男)	大学生
② サッカー部	4名(男)	大学サッカー部
③ 男子バスケット部	2名(男)	大学生・OB 社会人
④ ラグビー部	1名(男)	OB 社会人
⑤ 男子水泳部	2名(男・女)	OB 社会人・OG 社会人
⑥ 女子水泳部	2名(男・女)	OB 社会人・OG 社会人
⑦ 男子テニス部	2名(男)	OB 社会人
⑧ 女子テニス部	2名(男・女)	社会人・大学生
⑨ 女子バレー部	1名(男)	大学院生
⑩ 剣道部	1名(男)	大学職員
⑪ バトントワラー部	1名(女)	OG 社会人
⑫ ダンス部	3名(女)	大学生
⑬ 陸上競技部	1名(男)	大学生
⑭ 柔道・レスリング同好会	1名(男)	大学生
⑮ スキー部	1名(男)	社会人
⑯ 女子サッカー部	2名(男)	OB 社会人
⑰ 吹奏楽部	4名(男・女)	大学生2, OB 社会人2
⑱ ギター部	1名(男)	社会人
⑲ 演劇部	1名(女)	大学職員
⑳ イラスト研究会	1名(女)	大学生
㉑ スカウト活動	1名(男)	OB 社会人

また、高等学校の運動部や文化部でも多くの方々にお世話になっている。

① サッカー部	1名(女)	社会人
② 女子サッカー部	1名(男)	OB 社会人
③ 男子水泳部	1名(男)	大学生
④ 女子水泳部	1名(女)	大学生
⑤ 男子テニス部	1名(男)	大学生
⑥ 女子テニス部	1名(男)	
⑦ 男子バスケット部	1名(男)	
⑧ 女子バスケット部	1名(女)	大学生
⑨ 男子ホッケー部	1名(男)	大学生
⑩ 女子ホッケー部	1名(女)	
⑪ 野球部	1名(男)	社会人
⑫ 男子バレー部	1名(男)	
⑬ ラグビー部	1名(男)	
⑭ 陸上部	1名(男)	大学生
⑮ 柔道部	1名(男)	
⑯ スキー部	1名(男)	OB 社会人
⑰ ゴルフ部	2名(男)	
⑱ 剣道部	1名(男)	大学職員
⑲ ダンス部	1名(女)	社会人
⑳ チアダンス部	1名(女)	
㉑ ライフセービング同好会	1名(男)	大学院生
㉒ 茶道部	1名(女)	
㉓ コンピューター部	1名(男)	大学生
㉔ クライネスコンチェルト	1名(男)	社会人
㉕ ギターアンサンブル	1名(男)	社会人
㉖ 吹奏楽部	1名(男)	大学生
㉗ 社会科研究同好会	1名(男)	大学生
㉘ イラスト研究同好会	1名(男)	

5. 教職課程との連携

(1) 教職課程の概要

新制大学の発足と免許法の制定（1953年）に伴う免許主義の徹底により、大学での教員養成教育は、本学では教養教育、教科教育、教職専門科目により構成され、必要とされる最低単位数は次の通りである。

表 1 学校種ごとの最低必要単位数

	教職に関する科目	教科に関する科目	単位数
中学校教諭一種	31	28	59
高等学校教諭一種	29	36	65

また、1998年度の新入生から中学校の普通免許取得希望者は、文部科学省令で定める社会福祉施設等（本学では、成城ケアセンター・祖師谷ケアセンター・鎌田ケアセンター・成城アルテンハイム等）で5日間、特別支援学校で2日間の計7日間の体験を行う（1997年「介護等体験特別法」による）。

教職課程は上記のように多くの単位を修得必要があるため、途中で教職課程の履修を諦める学生が出るのは大変に残念である。ちなみに、昨年度の2年生は77人が履修していたが今年度は3年生が70人の履修となり、例年、1割前後の履修生が途中で諦めている。もちろんこの中には、将来の道を模索して悩んだ末での積極的な変更も含まれているので、単純な数字の比較は危険であるが、教職希望者へのより積極的な支援が必要である。

(2) 成城学園中高等学校での教育実習

文部科学省では、より厳しく公平な教育実習を目指して「実習校の開拓」を奨励しているが、時間・組織・費用等の面で難しいのが現状である。教育実習校は原則として公立学校は教育委員会での振り分け、私立学校では母校での実習を教務部学務課が中心にしてお願いしている。

成城学園中高等学校では、原則として卒業生の母校実習を引き受けている。ま

た、実習生がやむを得ない事情で母校での実習が出来ない場合（フランス語やドイツ語の教員免許等）、中高の教務部長との事前確認によって引き受けて頂くこともある。

余談ではあるが、大学に来て大変に驚くことの一つには、大学生（学園校の卒業生も）や大学教職員の中にも、初等学校、中高校を「付属校」と思い込んでいる人が多いのが残念である。成城学園100年の歴史を学べば、この学園は下からの積み上げで発展してきたもので、極端に言えば中・高校は「初等学校の付属校」であり、大学は「中・高校の付属校」であろう。そのために、大学は何事も「付属校だから当然」という意識を捨て、より積極的にお互いを知り合う事が大切である。そのため、前記の大学による「キャリアガイダンス」・「ミニ講座」の取り組みを大変に評価したい。

教職に関する科目として、現役の中高教員（国語・社会・地歴・公民・英語）による3年生の教科教育法や4年の教育実習の講義は、実践的で厳しくかつ丁寧な指導で、教育実習で大変に有効である。

以下に、最近の学園中高でお世話になった実習生の実数を示す。

表 2 成城学園中学校高等学校 教育実習生

学校	教科	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
中学校	国語	0	0	1	0	0	0
	社会	2	2	2	2	4	2
	英語	1	0	0	0	1	2
高校	国語	0	0	1	1	0	2
	地歴	0	0	2	0	2	1
	公民	0	0	1	0	1	1
	英語	0	0	0	0	1	0
	仏語	1	0	0	0	0	2
	独語	0	0	0	0	0	1
合計（人）		4	2	7	3	9	11

教育実習終了後、中学教務部長、高校教務部長、大学関係者（教職教育部会委員・教務部長・教務部次長・学務課長・学務課担当者）が集まり、学園中高校での教育実習を振り返ると共に、今後の教育実習について考え、同時に教職課程全般についての意見交換会を行っている。次年度の実習生の受け入れ依頼や、特にドイツ語とフランス語での教育実習受け入れ、ヨーロッパ文化学科所属学生の社会系免許の習得についての確認を行っている。

（３）中学教務部との連携

2010年度以降の入学の4年生に対して、教職科目としての「教職実践演習」が後期の2単位で開設された（2008年度「教員職員免許法施行規則の一部を改正する省令」。この科目は、当該演習を履修する者の「教科に関する科目」および「教職に関する科目」の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を習得したことを確認するものである。しかし、4年生後期の授業では学生のモチベーションの維持が難しく（教員採用試験の結果が出ている、一般企業への就職が内定している、就職活動や卒論で忙しい等）他大学同様に講座の開設時期が大きな問題であった。

そこで、教育実習前に教育現場の実情や心構えを勉強しておきたいと考え、実習前の5月8日（金曜日6限目）に前倒しして、中学校教務部長の中村先生に「生徒の現状と課題」とのテーマで講演をお願いした。学力とは何か、学ぶとは何か、教師の仕事は、授業とは、最近の生徒の人間関係など、パワーポイントや動画を駆使した熱心で楽しい授業で、学生達の感想も大変に好評であった。欠席した3名の学生には、当日の資料と講演を撮影したDVDを配布して感想を提出させた。

「教職実践演習」のシラバスを検証する必要があるが、教育実習前に現場の教員による生の現状報告をして頂く事は大変に有効で、これもワンキャンパスならではの良さであると思うので、中学校の先生方にはご迷惑ではあるが来年度もよろしく願いたい。また、出来れば高校の先生方にも願いたい。

（４）中学校のチューター

2009年、渡邊教務部長を中心にして「1年自習室」が開設された。これは、ワ

ンキャンパスの利便性を活用して、中学校の放課後の時間に、学習に遅れている1年生を対象に、成城大学の学生が1対1に近い形で学習の面倒を見るという形で始まった。

今年度は、「国語」・「数学」・「英語」を中心として、学習に遅れがちな生徒（全学年）の自主的な「自習室」において、生徒は希望する日（月・火・木・金・土の放課後の90分間）に自習用の教材を持参するので、必要に応じて大学生が「チューター（個別指導の講師）」として学習を援助している。

4月下旬に学生対象の説明会を中学校で行い、学校行事日や長期休暇中を除く5月上旬から3月上旬まで開かれ、今年度は大学生

23名が登録	4年生 8名（男子4名、女子4名）	
	3年生 6名（男子2名、女子4名）	
	2年生 9名（男子5名、女子4名）	
	教職科目の履修者 20名	
	学園高校出身者 6名	である。

自習室の開始時間（15：45）と大学の4限目終了時間（16：10）とのずれのために、登録したくても断念せざるを得ない学生も多く、アルバイトや就職活動で忙しくなる学生もあり、その調整やより多くの学生への呼びかけが課題である。

（5）生活部との連携

今年度より3年生の「生徒指導の研究」の講座（通年の30回、2コマ、合計72人）を担当するにあたり、基礎的な知識および理論の学習と、より実践的な現場での対応力を身につけることを目指した。特に、後期はイジメ問題、不登校、情報教育、特別支援学校、生徒指導をテーマにして、教育現場の実情と課題を紹介した。

半年後に教育実習を控えて不安で一杯の3年生に対して、彼らの時代とは違う中高の現場を実感してもらうために、中高生活部の先生方に大変に無理なお願いをした。「中学生の生活指導」・「高校生の生活指導」・「保健室より」のテーマでの講演会を4月より依頼交渉をし、同じテーマでの講義⇒講演、講義⇒講演のロー

テーションで実施した。

①「中学生の生徒指導」

11月14日（金） 6限目 312教室にて 2クラスの合同
中学校 生活部主任 原田先生

②「高校生の生徒指導」

12月12日（金） 6限目 311教室にて 2クラスの合同
高等学校 生活部長 鈴木（純）先生

③「保健室から」

12月24日（水）

中学校 養護教諭 武居先生

この企画は、当日が大学調整休日になり中止になる

いずれも、担当された先生方には時間的にも、また、それ以上に精神的に多大なご負担をおかけしたことをお詫び申し上げます。しかし、学生諸君にとっては、貴重な現場の生の声を伺うことができ、教育実習や教職への思いがより一層再確認した充実した講演であった。来年度も、シラバスの見直しや早めの調整によって、より充実した講演会になるように考えているので、ご迷惑でしょうかよろしくご協力をお願いしたい。

（6）登校指導

上記の3年「生徒指導の研究」の授業において、生徒指導の一例として朝の登校指導を実施した。成城学園前の駅から正門まで、初等学校の保護者、中高の教員、高校生のボランティアが児童・生徒の登校時の見守りと、右側通行の徹底による通勤者への迷惑防止に努力をしている。教育実習の時にはこのような指導をすることもあり、それ以上に学生自身も登校時に迷惑をかけていることを知り、挨拶などの声かけや現場の教職員や保護者の地道な努力を知って欲しかった。

そのために、初・中・高校の生活部長に連絡を取り、日程調整をしながら下記のように実施した。

① 前期（受講生 31 人）

6月23日（月）から7月5日（金）までの1回
土、日を除く10日間の7:30～8:45まで
本人の希望日のために、1日あたり2～4名

② 後期（受講生 41 人）

10月15日（水）から10月31日（金）まで1回
土、日、四大学祭での休校日を除く9日間の7:30～8:45まで
本人の希望日のために、1日あたり3～5名

1日が台風のために中止になったが、たまたま天気にも恵まれて予定通りに実施した。学生諸君の感想としては、最初は声かけも恥ずかしかったが後半は慣れて積極的に声も出て、挨拶のタイミングや目線の高さなども勉強になったとのことである。しかし、7時30分の集合では遠距離通学の学生に辛いとの声もあった。

筆者にとって毎回の立ち会いや指導が厳しいときもあるが、これも中高連携・保護者との連携・守衛さんとの連携の大切な実践であるので、来年度も継続しそして学年も回数も増やしたい。しかし、ある初老男性の地元の人に厳しく注意されたことが心に残る。「わざとらしい声かけや交通整理は邪魔なので、すぐに止める！」と。通学時の態度は、学校教育の基本理念や普段からの躰の表れなので、もっともらしい付け焼き刃より平常の躰をしっかりとやれとのことであろう。この諫言を肝に銘じて、より一層の連携を強化して各校でも実践してもらいたい。

（7）BLS（Basic Life Support）の実習

2年生「特別活動の研究」の授業の中で、部活動について3回（その位置付けと問題点、怪我の対応、指導者の役割）の講義と実技（テーピングの方法）を行っているが、教員として毎日生徒達と向かい合おうとしている学生諸君に、是非、BSLを経験して欲しくて昨年度より実習を取り入れた。

成城学園の第二世紀事業プランとして、「SEIJOGAKUEN Chain of LIFE ～いのちを守り合う成城ファミリー」のテーマのもと、初等学校の酒井先生、中学校の松本先生、高等学校の島田先生の指導の下、ライフセービング部員の協力を得て、

AEDの使い方や胸骨圧迫人工呼吸のやり方を学んでいる。

成城学園は上記のスローガンのもと、優秀なインストラクターと多くの機器・設備を備え、生徒・教職員・保護者への心肺蘇生術の講習会を実施している。心停止が目撃された人のうち、居合わせた人にAEDを使ってもらったケースはわずか4%にも満たない（消防庁 2012年）との数字がある。教員志望だけではなく、社会人の一人として心肺蘇生術を日頃から心がけておく必要がある。

学園内のインストラクターの先生方やライフセービング部員の諸君には、お忙しい中を丁寧な実技指導をして頂き厚く感謝申し上げます。また、これが単発的で終わらないように、大学4年間での長期的な見通しを踏まえたシラバスの検討が必要である。ちなみに、今年度の実技は

① 2年「特別活動の研究」

前期（受講生 31名）

6月26日（木） 6限目

松本先生 中学校会議室にて

後期（受講生 61名）

12月3日（水） 5限目

松本先生 中学校 大会議室にて

② 4年「教職実践演習」

2クラスの合同実習（受講生 60名）

11月29日（金） 6限目

島田先生 中高体育館 サブアリーナにて

6. 今後の課題

ワンキャンパスの利点を生かした学校間の連携は、地道にそして確実に実績を積み重ねている。しかし、筆者の勉強不足も含め、その意義や現状についての共有がまだまだ足りないと思う。また、過去の記録の掘り起こしや記録の整理、引き継ぎを確実にしてより良い連携が期待される。

筆者の課題としては、大学4年間の長期的な観点からのシラバス作りや、初・中高の教職員の方々との連絡や相談が不足していたことが反省される。また、授業を行うに当たり

- ① 始業前や6限目の授業で、講師の先生方や学生諸君の負担が多い。
- ② やむを得ず欠席した学生への補講。
- ③ その授業の評価方法
- ④ BLS 実習の体系化

などを来年度に向けて解決していくつもりである。

参考資料

成城学園ホームページ 2014年 www.seijogakuen.ed.jp/

成城学園第2世紀プラン 2014年 成城学園

成城教育第147号 「特集 第31回研究集会 異年齢交流」 成城学園教育研究所
2010年

成城教育第164号 「特集 第35回研究集会」 成城学園教育研究所 2014年

成城教育第165号 「特集 学園内各校の交流」 成城学園教育研究所 2014年

大学生チューター募集について (A4パンフレット) 成城学園中学校教務部 2014年
渡邊共成 「中学校教務部の報告」『蒼天第5号』 成城学園中学校高等学校 2010年

徳田光治 「教職課程の現状と課題」『成城大学共通教育論集第6号』 成城大学
共通教育研究センター 2013年